

# 図書館だより

'76・6

## 学生と読書

佐々木隆介（社会学）

今年に入って、社会学の時間に、マスコミとの接触状況を主とする簡単な社会調査を行なった。対象は大学2年、短大2年（今春卒業）、別科の学生約150名である。

その結果から、読書に関する事項の一部をとり出して紹介してみよう。

「あなたが今まで読んだ本の中で一番感銘を受けた本は何ですか」という問いに対して、約8割の学生が感銘を受けた本の名前をあげている。そして、それらの本の65%は日本のものである。また、そのほとんどが小説であることを知り、若い人たちに与える小説の影響についてあらためて考えさせられた。

感銘を受けた本を著者別にみると、三浦綾子（10名）、夏目漱石（8）、遠藤周作（6）、石川達三、ミッチェル（各5）太宰治、ジード（各4）、三島由紀夫、北杜夫、武者小路実篤、パール・バック、モーム（各3）などが目立つ。

一方書名では、「塩狩峠」、「風と共に去りぬ」、「こころ」、「沈黙」、「狭き門」、「道ありき」、「人間失格」、「大地」、「友情」、

「或る女」、「砂の女」、「されどわれらが日々」、「青春の門」、「ジャン・クリストフ」、「女の一生」（モーパッサン）、「人間の絆」などがめばしいところである。

一般的に小説が多い中で、注目される書物としては、高野悦子「20才の原点」、堀江謙一「太平洋ひとりぼっち」、外国のもので、フランク「夜と霧」、E・フロム「正気の社会」、ヘレン・ケラー「わたしの生涯」、アダムソン「野生のエルザ」、アダムスキー「UFO同乗記」などがあり、『思考の多様化時代』の一端がうかがわれた。

学生はそれぞれの愛読書を持っているようであるが、広く人文・社会・自然の各分野にわたって、いつまでも心の糧になるような書物について、ゆたかな情報を提供することが教師や図書館の役割であるということが、このささやかな調査を通じて得られた私の結論である。

## 図書館をあなたのものに

### はじめに

大学にとって図書館は欠くことのできない存在であり、図書館の利用が学生生活を支える要素の重要なひとつであるとはよく言われることです。しかし皆さんはほんとうにそう感じ、図書館を利用しているでしょうか。昭和50年度の本学図書館の統計を見ると、1日平均の入館者数が全学生教職員の約18%であり、同じく1日平均の貸出冊数が僅か約90冊、指定図書を加えても100冊に足りません。高校時代からの延長で試験やレポート等のさしせまった事態でもなければ図書館を思い出さないむきもあるようですし、稀には在学中図書館を全く利用しないで卒業する方もあるようです。その程度にしか図書館は期待されていないと言えるのかもしれませんが。

図書館では毎年新しい本や雑誌を購入し、皆さんのさまざまな要求に応えられるよう努力しています。大学の全ての人たちに図書館を自分の書斎、勉強部屋として利用してもらえなければウソだと考えています。まだまだ蔵書の規模も小さく、設備等にも足りない面があって、充分皆さんのお役に立てるまでに至っていないのは事実であり、皆さんの図書館に対する認識を云々するつもりは毛頭ありませんが、案外PR不足が原因で利用の上に生かされていない点もあるのではないかと思います。図書館では入学の時に簡単なオリエンテーションを行い、また「図書館利用案内」をお渡しして、利用に支障のないようにはしていますが、ここではまた別の面から図書館の利用法の一部をご案内したいと考えました。

### 図書館の資料

まず、図書館には何があるのか、です。図書館と言えば書籍や雑誌があるのは当然で、もちろん現在はそれらが最も主要な資料となっています。この図書館では昭和51年3月末現在で書籍が約83,000冊（和書64,000冊、洋書19,000冊）、雑誌が約1,600種類（和雑誌1,400種類、洋雑誌200種類）となっています。昭和51年度中に増加した数が書籍5,300冊、雑誌3,600冊です。書籍の利用については特に説明の要はないと思いますが、雑誌はちよっと厄介です。なぜならば、図書館にある雑誌の中で大きな部分を占めるのは、本屋さんでは見ることのできないもの、つまり全国の大学や短大等で発行しているいわゆる紀要類や、〇〇学会××研究会発行の論文集であって、それらがまた利用価値の高いものであり、かつ容易に入手できないために図書館としても利用にいろいろな条件をつけるからです。

雑誌の殆んど全ては図書館に到着すると閲覧室の新着雑誌コーナーに並びます。次の号が来ると入れ替えて書庫に移され所定の位置に並べられますが、一部の雑誌は後に製本されて閲覧室北側の雑誌コーナーに並べられます。新着雑誌コーナーにある間は、どんな雑誌でも指定図書と同様一夜貸出で利用できます。書庫に入ってしまうと貸出できない雑誌もありますのでご注意ください。その場合は館内閲覧か複写サービスを利用していただきます。

書籍や雑誌の外にも図書館にはいろいろなものがあります。まず、新聞は全部で21紙あり、その内北海道新聞、朝日新聞、読売新聞は、毎日前日の夕刊と当日の朝刊を（Asahi Evening Newsは前日のもの）ロッカー室のテーブルに出します。その週の方は縦じ込みにありますが、それ以前のものをご入用の際はカウンター



の係員に申し込んでください。なお北海道新聞は昭和42年4月より、朝日新聞は昭和39年10月より縮刷版を所蔵していますのでご利用ください。

次に録音テープですが、これは現在のところ語学（英、独、仏、中）と英文学に関するものだけで、約100本ほどです。残念ながら館内には聴取の設備がありませんので貸出します。期間は3日間で本数に制限はありません。所蔵内容についてはカード目録ができておりますのでご覧ください。

マイクロ・フィルムは日本の古典籍を取めたものが1セットだけしかありませんが、今後この種の資料が増加するものと思われます。近く新しい機械を導入して館内でもご利用いただける予定になっています。

上記の他スライド、フィルムやレコードもありますが、あまりに数が少ないので省略します。

### 指定図書

閲覧室の北側に指定図書のコーナーがあります。指定図書とはそれぞれの講義内容に即して必読の文献や関りの深い資料を担当の教員が選定したものです。本当は受講人数に見合った

冊数を揃えなければいけないのですが、なかなか余裕もないことでして、主に図書館の蔵書の中から選択しています。従って各タイトルについて1冊だけしかないものが殆んどで、また当然利用も集中するところから、館内閲覧は自由ですが、貸出は毎日午後4時から翌日午前9時まで（土曜日は午後2時から月曜日の午前10時40分まで）の一夜貸出となっています。貸出冊数に制限はありません。手続は午後4時から閉館時まで受付で取扱っています。

### 複写

複写は現在では図書館のサービスの中で最も利用されるもののひとつですが、これはあくまでも貸出のできない資料や、レポート作成等のための資料を有効に利用する方法のひとつであることを忘れないで下さい。複写できるのは図書館で所蔵している資料だけで、私物はいっさいお断りします。また資料の状態や、著作権法という法律の関係で複写できない場合もありますのでご了承ください。この5月から新しい機械を導入して、仕上がりの鮮明なコピーをお届けできるようになりました。料金は従来の用紙の大きさによるものを廃止し、1枚20円の均一料金となりました。

### 本や雑誌は誰のもの

図書館はあなたの書斎として自由にお使いください。ただしあなた個人の占有物ではありません。図書館もそこにある本や雑誌もそこを利用する全ての人たちの共有の財産です。次のようなことにご注意ください。

- 本や雑誌はていねいに扱ってください。書き込みをしたり、よごれた手で触ったり、雨の日に裸で持ち歩いたり、書棚から無理にひっぱり出したり、その他本がよごれたり壊れる原因になるようなことは絶対に避けてください。
- 使った後は返本台に戻してください。本や雑

誌の並び方には順序があるのです。もし違った場所に戻された場合、次に使いたい人は見つけることができません。館内で使った本や雑誌は自分で書棚に戻さずに返本台に置いてください。書棚に並べるのは係員がします。

- 返却期限を守ってください。殆んどの本が1冊づつしかありません。利用したい人はたくさんいます。借り出すのは権利ですが、期限を守るという義務もお忘れなく。

借り出した資料を返す時は受付の返本台に置いてください。延滞・更新の場合はご面倒でもカウンターまでおいでください。

## 書庫——キャレル

所蔵している資料は閲覧室と書庫に分けて置かれています。例えば英米文学の翻訳書及び日本語で書かれた作品研究、作家研究は全て閲覧室にあり、そこだけで用が足りるようになっていますが、日本文学の場合は大半が書庫にあります。中には閲覧室に並んでいる本だけを見て自分の求めるものが探しだせず、それであきらめてしまう人もいます。書庫にも本があることを忘れないでください。書庫の本は普通にはカウンター横のカード目録を見て必要なものを係員に請求し、係員が書庫から出してきて皆さんにお渡しするという利用方法です。もちろんこの場合も館内で利用する分には冊数制限はありません。

目録を介しての利用は実物を確かめないで品物を買うようなもので、どうにもピンとこないという人、また書庫の資料を主として使うためにいちいち図書請求票に記入するのがわずらわしい方、閲覧室から離れてひとり静かに読書、学習をしたい方などは、書庫に入り、或いは書庫内の一室に設けられたキャレル（一人用読書席）を利用することができます。殊に卒業論文やレポートを執筆される方が資料を探す場合や、試験期等で閲覧室もカウンターも混んでいる時期などは自分で書庫に入った方が早いのです。簡単な手続で利用できます。詳しくは「図書館利用案内」をご覧ください。

### グループ学習にゼミ室を利用してください

2名以上で共同研究をするような時には館内のゼミ室をお貸しします。空き室のある限り自由に利用していただいています。ご希望の際は人数、利用時間をカウンターの係員に連絡してください。

## 文献の探し方

さて、図書館で自分に必要な文献をどうやって探すかという問題ですが、これがなかなか簡単ではありません。この図書館で所蔵している図書その他の資料については一応カード目録ができていて、検索の主要な道具となっていますが、残念ながらこれだけで充分間に合うというわけには行きません。カード目録についてはオリエンテーションでも触れましたし、「図書館利用案内」にも多少載っていますのでここでは省略し、その他の文献探索法を少し紹介したいと思います。

図書館で**参考図書**と名づけている一群の書物があります。語学辞典、百科事典、地図、年表その他で、簡単に言えば調査、研究、読書のための道具になるものです。その中に**書誌**と呼ばれるものがあります。これは要するに書物の目録でして、それには地域別、所蔵機関別、時代別、主題別等実にさまざまな種類があります。この書誌を目的に応じて上手に使えば、必要とする文献を早く正確に探すことができます。図書館の職員も同じものを使って探すのですから、自分で使いこなせた方が便利というものです。それでは2・3の例を挙げて書誌の使い方を説明しましょう。

まず図書と雑誌に大きく分け、それも今回は日本語で書かれた図書を探す場合です。洋書、洋雑誌に関する書誌は当館では殆んど所蔵しておりませんし、紙数も限られていますので、いづれ適当な機会に譲ります。

古い時代の方から行きますと、日本の国が初まって以来慶応4年つまり江戸時代末までの日本人の著作（不問写本刊本、含漢文欧文）については、一般的には『**国書総目録**』（全8巻 岩波書店 昭38—47）が使えます。これは書名をあいまいに並べ、それぞれの書物について書名の読み方、著者、成立年、写本の所在、版本の所蔵、活字本の有無等を記していて、約50万項目を収めているといえます。明治時代より以前の書物を調べるのには基本的で、かつたい



へん便利な目録ですが、索引がないために書名の読み方がわかっていないと探せませんし、既存の目録からの転載を主とした編集ですので内容的にも量的にも充分ではありません。

下って明治時代以降ですが、この部分についての抱括的な目録はやはりありません。この図書館で所蔵しているものでは国立国会図書館編の『明治期刊行図書目録』(全6巻 昭46—51)が約12万項目を取っていて、一番大きな目録となっています。本文は図書館の分類方法に従って並べられていますが、最近書名索引が刊行されて使いやすくなりました。ただしこの目録は国立国会図書館で所蔵しているものに限られますのでご注意ください。

大正、昭和初期は目録の弱体な部分で、この図書館にも使えるものがありませんので省略します。昭和も戦後になりますといろいろな目録が出てきます。『出版年鑑』はその前の年に日本国内で刊行された書籍、雑誌のリストで本文は分類別ですが、書名索引と著者索引がついています。この図書館では昭和26年版から所蔵しています。この他人文、自然等の分野別にまとめた『日本総合図書目録』(毎年刊 ほぼその時点で購入できるものを収録 書名索引有り)、『全日本出版物総目録』(毎年刊 国立国会図書館に表記の年に取められた国内の全出版物の目録 含雑誌 昭和39年版から所蔵)、その他各図書館単位の蔵書目録も多少ありますが、くだくだしくなりますので省略します。

全集や叢書がたくさん出版されていますが、どの全集がどんな内容を持っているのか、逆に自分の求める文献がどの全集に入っているのかを探すのも、なかなか容易ではなく、この図書館のカード目録でもそこところが弱点となっています。そこで**全集、叢書の内容に関する目録**を何点かご紹介します。ひとつには前述の『**国書総目録**』が使えます。個々の書物について全集等に取められている場合はその全集名を記していますからそのまま索引として使えますし、第8巻には叢書目録として江戸時代までの

日本人の著作を取めた叢書で昭和39年までに刊行されたものを載せていますので、各全集叢書の内容一覧として利用できます。

『**国立国会図書館編全集叢書細目総覧**』は国初から現代までに日本人の手によって刊行された全集、叢書類の内容細目索引付きの目録ですが、現在古典編の本文だけが刊行されています。収録の範囲は「明治以降に刊行された全集、叢書のうち、その細目の全部、または大部分が、国初より幕末までの間に日本人の手になったもの」で「昭和45年末までに刊行を開始したもの」となっています。写本叢書が除外されていたり、収録されているものでもチェックの不完全さが目についたりしますが、この種の目録では一番新しいだけに収録数も多く、国立国会図書館に所蔵されている場合は同館の請求番号が示されていて便利です。古典編の索引、並びに近代編、翻訳編の刊行が待たれます。

単行本では『**増訂日本叢書索引**』(広瀬敏編 風間書院 昭32)があります。これも収録範囲は国初から明治初年頃までで、収録数は多くはありませんが、各叢書について簡単な解題を巻頭に載せているのが特徴です。増訂部分は本文に組み込まれず最後に一括してあります。その後新版が刊行されていますが当館にはまだ入っていません。

なお、簡単に全集名・冊数・発行所・刊年等がわかればいいとのことであれば『**全集叢書総覧**』(全訂版 八木書店 昭50 収録：明治元一昭和48)や、『**全集総合目録**』(1973年版、1975年版 出版=ニュース社 収録：第2次大戦後)も使えます。

以上のように既存の叢書目録は数種類ありますが、それでもこの図書館所蔵の叢書類の内容が直にわかるというわけには行きません。そこで当館で所蔵する全集叢書類を対象に、その内容が簡単にわかるものを作ろうとして考えられたのが『**当館所蔵全集叢書類内容細目集成**』です。まず第一段階として全集類の目次を全部複写して、各全集別に綴じ、いちいち現物を見な

くてもその内容がわかるようにしました。現在日本文学の個人全集から作業を始めていて、出来上ったものはカウンターの上に置いてあります。ご利用ください。

次に**解題書**を少し紹介します。解題書とは特定の書物についてその著者・成立年・形状・内容等を記したもので、これにもたくさんの種類がありますが、今回はごく一般的なものととどめます。個人の著作では何と言っても『**国書解題**』です。当館所蔵のものは大正15年の増訂改版2冊本ですが、これには国初から幕末までの和書約25,000点についての解題を載せています。著者・分類・字画の3索引があって検索に便利です。著者の伝記もあるのが特色です。ただ刊行後かなりの時間が経っているために、その後の学界の進歩、古典籍の発見等により、解題内容を改めなければならない点も散見されます。

『**群書類従**』は日本の古典籍を集めたものとして利用価値の大きなものですが、そこに収められた3,493点(含統群書類従)の書目の解題書が出来ています。『**群書解題**』(全30冊)がそれで、第一級の史学者等が執筆を担当しているだけに記事には信頼がおけます。『**群書類従**』中の文献を使う際には、それがどういう素性のものであるのか、『**群書解題**』で確認しておくことをお勧めします。翻訳書も含めてというと、一番大きなものは『**世界名著大事典**』(全8巻 平凡社 昭35-37)で約12,000項目を取っています。本文は書名のあいうえお順ですが書名著者分類の3索引があり、また第8巻目が約7,000人を収める著者名事典となっています。

### 図書館に資料がない場合

蔵書が僅か83,000冊、その他の資料も微々たるものですから、皆さんの必要とするものがこの図書館では手に入らないということが往々にしてあります。そうした場合にはどうすればいいのか。あきらめるのは早すぎます。実はそんな時こそ図書館の言わば腕の見せどころであ

り、図書館の重要な課題なのです。自分で探してみてもどうも思わしくない場合は、遠慮なくカウンターの係員に相談してください。係員は本を運んだり、貸出その他の手続をするためだけにいるのではないのです。

さて、どんなに探しても皆さんが満足できる資料がこの図書館にない場合、方法は二つあります。ひとつには図書館に新しく購入させる方法があります。カウンターに購入希望図書の申込用紙がありますので必要事項を記入して提出してください。ただしこの方法は現在書店等から購入できるものに限られますし、予算その他の都合でご希望にそえない場合もあります。また皆さんに提供できるまでに多少の時間がかかるのが難点です。

もうひとつの方法として他の図書館を利用する途があります。現代は情報化社会と言われていて、毎年出版される本や雑誌も莫大な量になり、ひとつの図書館が手持の資料だけで利用者の要求を充たすことは到底不可能です。そこでたくさんの図書館がお互いに協力しあって、それぞれの利用者の要求に応じて行こうとする考え方が生まれ、今日ではそれが定着しつつあります。つまり利用者の皆さんは、目の前にある自分の図書館の資料だけを相手にするのではなく、日本全国の、必要ならば全世界の図書館を自分の図書館の延長と考えて必要な文献を入手することができるのです。求める資料がどこの図書館にあるのかをつきとめるまでには、やはり多少の時間がかかりますが、それでも札幌市内の場合は比較的早く入手できます。入手方法は複写が主ですが、現物を借用できる場所もありますのでその都度ご相談ください。窓口は参考係です。なお通信費・複写料金等、入手に要した実費は利用者の負担となります。ここ2・3年の主な依頼先は国立国会図書館、北海道立図書館、北海道大学附属図書館、北海道教育大学附属図書館などです。



## 資料紹介

## 日本国語大辞典 全20巻

小学館 昭和47—51年

手紙・レポートなど、なにを書くにも常に手許に置いて調べられる辞典、それが国語辞典であろう。手軽な辞典は数多く出版されているが大辞典と呼ぶにふさわしい国語辞典は、出版されてすでに久しい。『大言海』『大日本国語辞典』等、いずれも戦前の著作なので、見出し語は歴史的仮名遣いであり、当然ながら時の隔たりを感じさせる。固有名詞等の収録も多くはない。こうした事情をふまえ、現代に密着し、体系だった国語辞典が待たれていたのである。言わば『OED (Oxford English Dictionary)』にも匹敵するような辞典、そんな企画と十数年の作業により完成されたのが、この『日本国語大辞典』である。

収録語数約50万。見出し語は現代仮名遣い。従来あまり収録されなかった固有名詞、専門語、漢語、方言、俗語を多く含み、時代も上代より現代におよんでいる。語説明には、各時代におわたる語意の移り、語源諸説の列記、語歴、古辞書の確認など、歴史的記述と言う意図を強く示しているが、更に200万の用例中には漱石・鷗外を始め、近代、現代の文芸作品をも多く用いて、生きた言葉をつかんでいる。語説明のこのような広さは、本書の特色でもある。(補助注記の活用で、二重検索を省くことができる)

発音に標準アクセント、京都アクセント、アクセント変遷、なまりなど、専門事典以上の構成を見せているのも別な特色で、語説明に厚みを、そしてまた別な究明の形を加えた。

昭和期の業績を集約した国語辞典である。

## 書齋訪問

## 組曲「大畑耕一先生」(音楽)

アルマンド 「音は言葉では表現できないものだと考えていたが、音楽評論家とは、それが出来る才能の持主である。そんなことに気づいた。」吉田秀和全集の読後感。



## クーラント 先生

は、保育科生に音楽的素養を高める目的の教育を受持たれ、又広く合唱指導でも活躍して居られます。その見地から、音楽書だけではなく、隣接学科である美学・心理学等の関係書も体系立てた読書が必要であると教えて下さいました。個人的には「パッハ叢書」の刊行を楽しみに期待して居られます。

サラバンド 先生は、私共の毎日の生活は、何処へ行っても音ばかり、まさに音の氾濫であると指摘なさいました。それは画を描くために、純白であるべきキャンパスが、灰色に染ったようなもので、人々の音に対する感受性は損われます。この麻痺した情感、汚れたキャンパスをもとに戻すために、例えば「音のない空間」がほしい。先生の発想は、いかにも音楽家らしい、みずみずしいものです。

ジーク 先生は、保育科にあるレコードを分類して目録を作り、利用しやすい方法を考えて、ファイル等も色々と工夫をして居られます。お忙しい中で、音のライブラリーを作って行きたい、それも音楽史以前の古い音を集めたい。入手は困難かも知れないが、広く触角をのばして……と積極的に、その計画はひろがり続けられるのでした。

## フリゼケ・アンゲラ先生

(英文学)

さわやかな初夏の午後、新茶の香りのする研究室でお話をうかがいました。

先生が学ばれたのはドイツのある総合大学でそこには中央館ともいべき大きな図書館と、それぞれの学科ごとのいくつかの小さな図書館がありました。いわゆる中央館は、教授と特別に許可を受けた人以外は書庫に入れず、学生は目録を手掛りにして本を借りるのだそうです。そしてこの目録からその大学だけでなく他の市や他の機関の蔵書を知り、図書館を通してそれらを借りることもできました。当時貸出冊数は1人25冊で、期間は4週間ですが、必要な手続をすれば3ヶ月間も借りておくことが許されました。しかし反面では出納時間が短かく不便なところもあったようです。

中央館は借りるだけで、何かを調べたり勉強したりする場合には、学科ごとの小さな館を利用します。この館の蔵書は開館中は館内利用に限られ、貸出は図書館の閉館時から翌朝まででした。

ドイツの大学では、講義があるのは7ヶ月間で、あとの5ヶ月間は、学生の自主的な計画のもとに勉強が進められ、そのためにも図書館を大いに利用しなければなりませんでした。そこで自分の読



みたい本を確保するために、開館と同時にとびこんだり、順番を待つなどということは珍しくなかったそうです。こうして学生は図書館に慣れ親しんでゆくわけです。

先生が学生のみなさんに望んでいらっしゃることは、誰もが読む本を読むというだけではなく、たとえば発見の喜び、とでもいいたまうか、誰にも読まれず書庫にひっそり眠っている多くの良書をぜひ読んでほしいということでした。

最後に強調なさったことは、勉強と遊びのけじめをしっかり身につけてほしいということでした。もし先生が学生のみなさんにきびしいという印象を与えているとしたら、それは先生のこんな願いの現われなのでしょう。

## 学生生活の喜び

文英2年 木村 晶子

入学後、1年余り経った現在、今まで過ごして来た時間を振り返ってみると、自分の歩むべき方向をはっきりと見出したというようなことはなかった。ただ単に、学校に通い講義を受けて、なんとか試験に通ったということだけである。

しかし、そのような状態においても、自分なりに学内においての楽しみを得ることができた。それは、図書館内を探察することである。

本棚をあちこち見回して、どこにどんな本があるのかを、友人に教わったりしながら記憶してゆくわけである。そうすると、何かしら図書館にある本を1冊づつ征服してゆくといった勝利感に似たものを味わい、そこに学生としての喜びを感じることができる。また、ふと目についた本を手にとって評価してみたり、内容はわからなくても表題だけを見て、このような難しい本に接することができたという自己満足に陥ってみたりもする。さらに注意深く見てゆくと、今まで気がつかなかったような小さな発見をして、新たな興味をそそられることもある。

このように、所詮は自己満足にすぎないものかもしれないが、学生としての格別な喜びを少



しでも得るならば、張りのある生活になるように思う。それは、いろいろな方面に見い出せるが、やはり大いに友人と語り合い、漠然としたものではなく何か一つの目標物の中から捜し出すことが最善であろう。学生としてでなければ味わうことのできない喜び——そういうものを得てこそ、大学で学ぶ価値を見い出すことができるのではなからうか。

## この頃思うこと

別科 松浦 敦子

まぶしい日差し、木々の深緑に初夏を感じた。よく、図書館で本を読んだり、勉強をしたりする学生たちの姿を、うらやみの目で見ていたものだが、この4月から学生にもどり、こうして図書館の一角で机に向かっている。学生から図書館員へ、また学生へと図書館とのつき合いは5年目である。今までと全く反対の立場にかわっても、ほとんど抵抗なく利用者としてドアをくぐっている。それでも時には、目録を引いていて、自分の書いたカードにあたり、少しドキリとさせられることがある。

さて、この目録であるが、利用者は使い慣れたものでは、なかなかわかりにくいもののようにだ。が、分類目録と書名著者名目録それぞれの

特質と双方の関連性を一度理解すると、さほどめんどろなことはないと思われる。目録全般の体系自体、完全といえないかもしれないが、もっと上手に利用することによって、図書の上手な利用に通じるのではないだろうか。すべての図書をじかに手に取って利用できるのが理想的な形であることはいうまでもないが、現段階での閉架図書探索の道は目録にかかっているの、気軽に引けるように慣れたら、求める図書へのアプローチも容易になるのではと思う。

図書館ときくと「静かな場所」というイメージが湧き上がる。実際、校内が騒々しくても、この中だけは常に静けさが漂っている。なんとなく落ち着いた気持ちになる。どの顔も真剣なまなざしで活字を追う。あるいは一心にペンを走らせる。ただ時おり感じることは、雑誌や新聞コーナーには、もっとリラックスした雰囲気があってもよいのではということ。図書館の中に少々くつろいだ気楽な気分で行ける場所が必要ではないだろうかと思っている。

窓の外は徐々に夕暮れの気配が忍び寄る。時間は止まっていない。学生とは自由ではあるが、それをどう過ごすかは本人次第、ということは私自身への戒めのことばでもある。時間的にも環境的にも最も恵まれた今この時に、読書との出会い、図書館との出会いを大切にしたい。充実した学生生活を送りたいと思うこの頃である。

### 英語学論説資料

論説資料保存会 昭和44年～

資料紹介

この資料集は、国内発行の大学・短期大学紀要、研究所・学会の機関誌、一部の市販誌などを対象として、掲載された「英語学」関係の学術論文を各年度別に収録したものである。（純粋に「英語学」を主題とした専門誌は含まれない。）論文は国会図書館雑誌記事索引や、英語年鑑（研究社）に拠り収録され、「言語学英語学一般・意味論・比較研究・英学」「史的研究・古代英語・中世英語・近代英語・雑」「文法・語法」「音韻論・語彙論」の4分冊に主題編成されている。保存資料として1967年度分より継続刊行中で、1973年分を見ると二百数十篇の論文が収められ、その収録率は高い。

発表年度と主題とを手がかりに、国内論文を容易に検索できるので、特定論文を急いで読む、または関連論文をひろく読む、そんな目的の利用に適している。本館では、全巻を参考書架に常置しているの、原資料として参照資料として直接に利用していただきたい。ただ原誌を縮小製版したものであるので、論文の複写等は係員と相談をして、原誌を用いられるのが便利と思われる。さらに類似資料として「国語学論説資料」（1965～）があり、本館では全巻継続所蔵している。

## 資料紹介

## 「賞と記録の人名事典」増補版

自由国民社 昭和49年

『現代用語の基礎知識』の別冊として収録されたこの人名事典が、その本誌から独立して出版されるようになったというのも、この事典の持つユニークさと、それを読者自身が必要としたからであろう。

たとえば「第1回芥川賞の受賞者は？又、その受賞作品は？」という質問にもすぐ答えてくれるこの事典。それと同時に各回の受賞者も一覧できるように記録されている。芥川賞では受賞作1作で消えていく作家も多い。これらを全部収録した事典というのは稀である。この他、文化勲章をもらった人から、ねむの木賞や日本レコード大賞受賞者、さらには映画コンクール受賞一覧や国際マラソンの歴代優勝者一覧など普通の百科事典ではとても引けないような事項がいくとも簡単に調べることができるという便利な事典。日本における政治関係から文学、芸能、スポーツに至るまで、広く百数十種におよぶ賞の受賞者とその業績を収録している。又、直木賞もよま話など、その賞の由来やエピソード等を読むのもこの事典の楽しい要素の一つであろう。

## NEWS.....

## 新継続雑誌紹介

閲覧室備付の雑誌が4誌増加になりました。

月刊	婦人公論	中央公論社
	本の本	ポナンザ
隔月刊	衛生化学	日本薬学会
	食品衛生学雑誌	日本食品衛生学会

## 目録カードの移動

閲覧室の目録ケースが4基ふえて、和漢書の目録の引出しが、数百個分移動しました。ケース上の案内や各引出しの見出しを確かめてからカードを利用して下さい。ファイルが少しゆっくりして、使いやすくなりました。

## 図書館委員交替

家政科 丹先生 → 山本先生  
保育科 奥山先生 → 沖津先生

## 夏休みの休館予定

- 休館 7月26日(月)～8月10日(火)
- 休館中は蔵書点検・書庫消毒などの作業を予定しています。上記期間と日曜日以外は、休日開館の取扱いをします。詳細は公示を致します。休館中の図書館は落ち着いていいですよ。
- 休日開館時間 9時30分～16時30分

## 館職員の移動

退職	整理係	松浦 敦子	3月31日
	書庫係	久保田晴子	6月30日
採用	整理係	五井 園子	4月1日

## 編集後記

図書館はあなたのもの——我がものと思えばかるしと言う訳で、毎日の御不便をしばし御辛抱下さるまいか。利用者とは、立場上の時差があるので、業務に対する御不満も多いと思う。長期的な展望で館の運

営をはかりつつ、同時にすぐ手の届くところのちりも払いたい。

館報を、図書館を身近かにするための手段として、用いていただきたい。3号は不体裁なもので、お恥ずかしいが、意図しておおわかし得なかった面をも、お読み下されば幸いです。夏、蔵書点検が始まる。

藤女子大学  
藤女子短期大学

図書館だより

第3号 1976. 6. 30 発行

発行者 札幌市北区北16条西2丁目  
印刷者 札幌市東区北12条東3丁目

藤女子大学図書館  
天使院印刷製本部